

エコツーリズムにみるコンフリクトから対話の可能性へ

榎本 直樹（文学研究科 臨床哲学）

はじめに

本研究では、前回の調査研究に引き続き、エコツーリズム、あるいはその考え方を実践するためのツアー形態であるエコツアーをめぐるコンフリクトの問題を扱った。本研究の目的はそうしたコンフリクトに対し、直接・間接を問わず関わる人々が、コンフリクトを理解し、その軽減に向け取り組むために何が必要なのか、あるいはそうした取り組みの中で「対話」がどういう意味や可能性をもってくるのか、を考えることにある。それゆえ、エコツアーがさかんな八重山諸島に赴き、そこにどういう問題があり、またそれに対しどういう取り組みがなされているのかを見る必要があると考えた。

調査の概要

場所：石垣島、西表島、竹富島

期間：2月15日～3月9日 24日間

方法：関係者への聞き取り、資料収集、エコツアーへの参加

石垣島では、「ふくみみ」「ビー・ワンダー」主催のエコツアーに参加すると共に、エコツアーをとりまく問題について聞き取りを行った。また、竹富町役場の観光課、観光協会、市立図書館などで資料収集などを行った。西表島では、「LB カヤック」主催のエコツアーに参加。西表島エコツーリズム協会をたびたび訪問し、エコツアーの現状と問題、観光業全体の問題、地域との連携の試みについて聞き取りを行うと共に、協会が行っているネイチャーウォークに参加した。また、パックツアーに組み込まれているような観光客向けのツアーなどにも参加した。竹富島ではNPO たきどうんが主催するツアーに参加し、その後ツアーのねらいや竹富島観光にかかわる問題について聞き取りを行った。

成果の概要

現在、沖縄県では、県をあげて環境保全型の観光に取り組んでおり、今回訪れた西表島でも仲間川をモデル地域として、フィールドの保全方法や適正な利用のルール作りが行政主導で進められている（「沖縄における環境保全型観光促進事業」18年度より3年間）ほか、その他の場所（西表島ヒナイ川、石垣島吹通川など）でもエコツアー業者による個々のルール作りにむけた話し合いが行われている。

仲間川では石垣島を拠点とした日帰り観光客に対する動力船による遊覧観光が主に行われているが、いくつかのエコツアー業者も同じ河川を利用している。ここでは、マストツアーとエコツアー、あるいは動力船とカヌーといった関係だけでなく、地元の観光会社と本土の大手ツアーリストとの間においても対立があることが明らかになった。また、西表島西部に位置するヒナイ川においては、新たなルール作りの場面に於ける対立が見て取れた。ヒナイ川では2005年に動力船が廃止されたこともあり、そこを利用するのはエ

コツアー業者である。ヒナイ川にはカヌー組合が存在し、河川の利用に関して独自にガイドラインを作成している（1ガイドにつき7人、1業者につき2グループまで）。しかし、近年エコツアー業者が増加したこともあり、安全面などへの配慮から総量規制をするかどうか議論されているが、様々な理由から反対が根強いようであった。

「観光促進事業」のワーキンググループの委員をしておられる方をはじめとする、こうしたルール作りに関わる人々から話を聞くと、その話し合いの場では、結局のところ観光促進か自然保護かという視点のみが強調され、地元、地域といった視点が欠落していることを問題視していた。例えば、エコツアーガイドに限らず、観光業に関わる人の多くが島外出身者であり、島で得た利益がきちんと地元還元されないといったことや、島の文化や伝統なども含めもっと知って欲しいと考える地元の想いがなかなかうまく反映されないといったことが挙げられる。そうした話し合いを受けて、ある関係者が、問題は「人間と環境の関係」ではなく、「人間と人間の関係」であり、再度、みんなが「そもそも〈エコツーリズムとは何か〉ということから話し合う必要がある」と言っていたのが印象的であった。

そうした「地元」「地域」という視点を考える上で、竹富島で参加した「素足で歩く竹富島ツアー」は興味深かった。このツアーは、エコツアーとしては珍しく、自然ではなく伝統や歴史がテーマであり、またガイドを務めるのも竹富島の老人であり、島の伝統や歴史を観光客に伝えたいという想いと地域の活性化という視点がうまく組み込まれたツアーであった。このツアーは、エコツアーにとってのガイドの質という問題を考えるきっかけとなるように思われた。つまり、エコツアーの中でも、エコツアーを「教育効果」（単に一方的な知識伝授という意味ではなく）を含めたものとして行うのか、単に「娯楽効果」のみの営みとして考えるのか、という点で大きな違いが出てくるであろう、ということである。実際、石垣島や西表島でエコツアーの普及や問題点の改善に向け、積極的に取り組んでいる人々の口からは「環境教育」という言葉が数多く聞かれた。

このように、ルール作りの場面をはじめとするエコツーリズムをめぐるさまざまな問題状況では、利害や立場の異なる者同士、あるいはそれらを同じくしても背景の異なる者同士の間で、「環境」や「エコツーリズム」の認識をめぐって、ディスコミュニケーションが起きていることが明らかになった。

おわりに：今後の課題

今後は、ルール作りやエコツアーの実践の場面、あるいはエコツアーとは名乗らずともそれに類似した実践にかかわっている人々が「環境」や「エコツーリズム」ということをどのように認識しているのか、ということ聞き取りによって明らかにしつつ、そもそも「エコツーリズムとは何か」について考えていくと共に、そうした認識のズレを調停する可能性について、またそうした場面で「対話」がもつ意味や可能性について、引き続き考えていきたい。